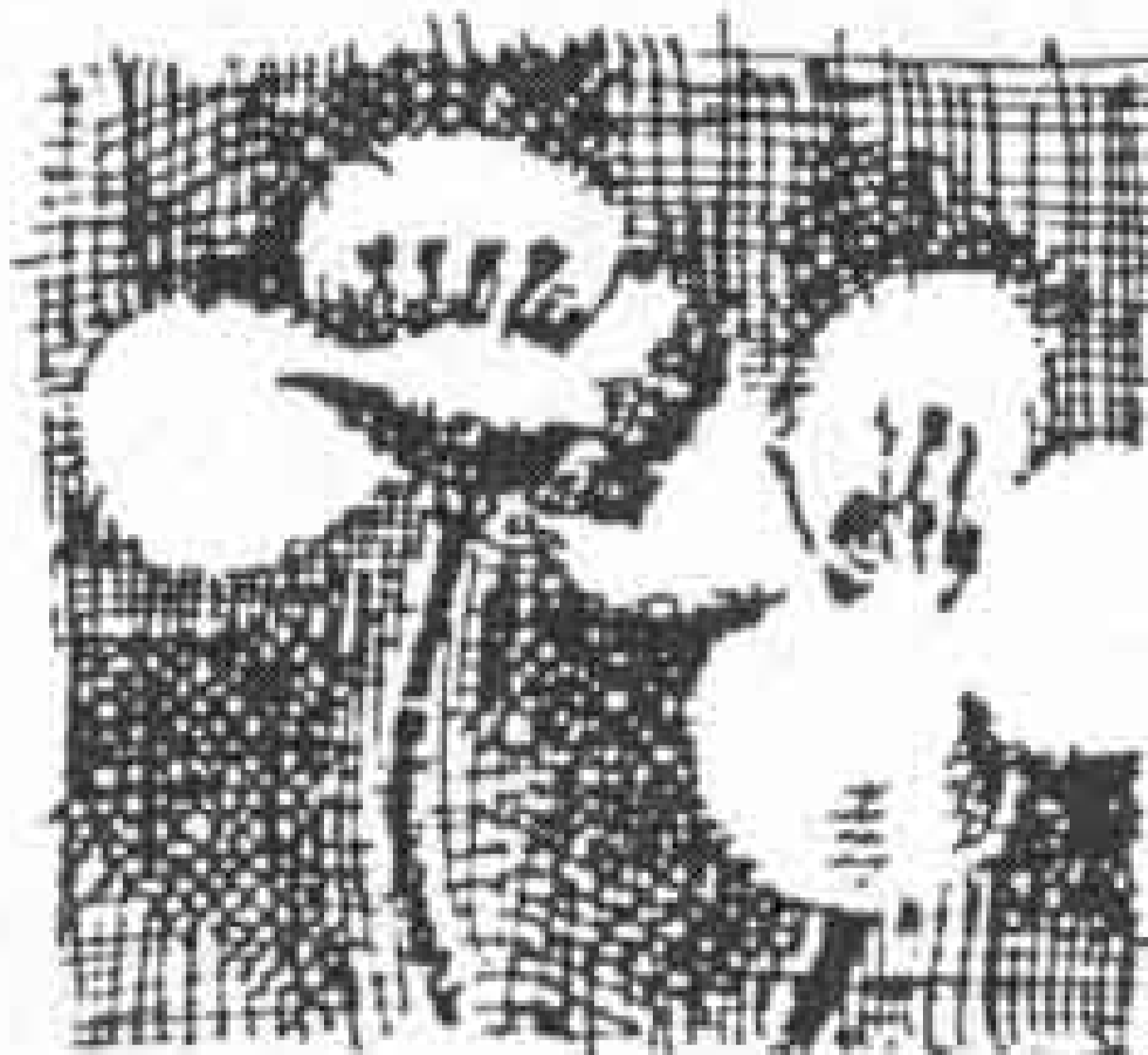


あなたタイム



富士市の人口23万1千人。さまざまな価値観を持ちながら、いろいろな人がこの街で生きています。今月号は、その人なりのすてきな世界を醸し出しているお二人に、いいお話を伺いました。越紅さんは、学生の集まる談話室で、木又さんのお話は、バラジャムのたっぷり入った紅茶を飲みながら。

学んで帰りたい。日本人のあいさつとサービス精神。

しゅう えつ こう
周越紅さん

(原田・26歳)

富 士市に行ってみよう。富士本町通りにある民間語学学校。ここには現在、韓国・フィリピン・マレーシア・中国などからやってきた人たちが、昼間は学校に通い、夜間はアルバイトをしながら日本語を勉強中。中でも一番大勢なのが、中国の学生。六十人います。周越紅さんもその中の一人。昨年十月、富士市と友好都市提携を結んでいる中国の浙江省嘉興市から来ました。

越紅さんは、杭州師範学院で声乐を専攻。約四年間は、嘉興市で音楽の教諭として働いていました。いつしか、「日本の文化を理解したい。日本語を勉強したい。富士市に行ってみよう」の思いが募ったのは、「友好都市提携に情熱を燃やす父の仕事を見ていたから」。父とは、提携時の嘉興市長だった周洪昌さんです。

五ヶ月間の富士市での生活。勉強もアルバイトも人一倍頑張ってきた結果、ストレスが頭痛や歯痛



となつてあらわれてきました。「これは、自分の心の問題。上手に気分転換しないとね」(笑) 一生懸命に仕事をする日本

一 「日本は、中国とは全然違います。感動したのは、とても一生懸命に仕事をする。最初は、なぜそんなに一生懸命になるのか理解できませんでした。私のこの経験を持って帰れば、中国の経済力はもっと高まるかもしれない(笑)。礼儀やサービス精神も学んでいます。中国人はあまりあいさつをしません。あいさつがあると気持ちがいい。「いらっしゃいませ」や「お待たせしました」と、態度も丁寧ですね。でも、日本語は難しい。特に敬語が・・・」

日本の歌でおはこは、さくらさくらとゆりかご。レセプションに招かれて、たっぷりとした声量を披露することもしばしば。市内の音楽家とのネットワークも、少しずつ広がってきました。

富士市中をバラの香りで、一つに包み込んでみたい。

き また まさ み
木又将実さん

(間門・65歳)



バ ラのコレクター。一年三百六十五日、バラ栽培の本が写真集を見ない日はないと、言う木又将実さん。自宅の庭には、薄いピンクのかぐわしい「デインティベス」、花びらが明るい赤色の「クリスチャンディオール」、切り花に向く「ローテローデ」など、百七十種がそろっています。

バラの楽しみ方は人それぞれ。展覧会出品用のバラをつくる人、交配を重ねて新しい品種をつくりたい人、色を組み合わせて花壇を美しく飾りたい人など。「私の場合は、なんでも集めてみたい性格で、緑と花の百科展で珍しい品種を探したり、大学の先輩がやっている千葉のバラ園まで出かけて買ってきます。バラのコレクターと言っても言えるでしょうか」(笑)

木又さんは、大学では獣医畜産を専攻。馬や牛・羊など生き物を扱うのが好きでしたが、バラの栽培も二十年ほど前から本格的に始めました。現在では「日本バラ

会」の会員でもあり、三年前にできた「富士市バラの会」の中心となって活躍しています。

六 割は育てる楽しみ。「バラは、十のうち六割までが育てる楽しみです。正月くらいから毎日花壇に入って、大輪に育てようか、どんな匂いに咲かせようかといういろいろ考えます。病気を出不さないようにするのでも大切で、治療よりもまず予防ですね。春にいい花を咲かせるために、この時期もう一頑張りです。五月の連休ころにつるバラが咲き出して、中旬から花の盛り。五月いっぱい次々に咲き続けます。

花は、老人ホームの駿河荘や公民館・授産施設づくしに届けていますが、一度はバラの劇場と言われているロゼシアターで、「バラの展覧会」を開いてみたいと思っています。富士市中をバラの香りで一つに包み込んでみたい。夢ですね。これは」(笑)